

今回私共は、酵母とチャイニーズハムスター V79 細胞を用いてポリエン抗生剤と BLMA₂ の併用効果を観察した。その結果ヘキサエン以下のポリエン物質とは著明な併用効果がみられたがペンタエン以上の物質だと併用効果がみられないことが判明した。そこでポリエン系抗生剤を大ポリエン (Amphotericin B, Nystatin), 小ポリエン (Filipin, Pentamycin, Pimaricin) の2つのグループに分類した。

質疑応答

坂井 (東海大) 培養細胞の Fibroblast は癌細胞由来のものに薬剤相乗効果が認められたのか? 正常の Fibroblast に対してはどうであったか?

小宮山 (九州大) どのような種類の細胞でも同様の傾向を示す。しかし、細胞間では異なる。

混合細菌叢の SEM 所見

佐藤 喜一*

近時、耳鼻咽喉科感染症の領域にも混合感染症を思わせる細菌叢の検出が多くなっている。例えば慢性中耳炎の急性増悪症を経日的に細菌検査を試みると、ブ菌、溶連菌、インフルエンザ菌の他に緑膿菌が培養されていることに、しばしば気づくことがある。

これらの病態像を形態学的に確認する目的で *in vitro* の実験モデルを作成し、経口的に走査電顕 (SEM) にて観察したので報告した。

材料および方法

チョコレート寒天培地に耳漏より分離したブドウ球菌、インフルエンザ菌、緑膿菌を同時混合培養し、24時間後、2日、3日と経日的に SEM 観察用に培地をふくめて資料を作成した。なお初めの24時間は37℃で培養したが、その後は室温で保存した。

24時間後に採取したサンプルではブ菌、イ菌、緑膿菌が明らかに混在している像がみられたが、とくに

イ菌は優勢を示し培地中のヒツジ赤血球の周囲に集まっている印象を得た。2日目の標本ではイ菌よりも、ブ菌、緑膿菌が優勢を示している傾向にあり、とくに緑膿菌が目立ってきていた。イ菌は自己融解している像が所々にみられた。この傾向は3日目のサンプルにおいても類似していた。

質疑応答

河村 (順天堂大) 慢性中耳炎の混合感染菌の統計学的観察から黄色ブ菌は緑膿菌の居る所へは入りこみにくい、緑膿菌は黄色ブ菌のいる所へもどンドン入ってゆくようであるという仮説を東日本感染症学会で報告したが、佐藤教授の実験結果と大体一致するようで非常に興味があつた (追加)。

佐藤 (金沢医大) 先生のお考えを証明致したく努力するつもりです。

点耳薬の作用動態—SEM 観察—

佐藤 喜一・山下 公一・市川 朝也**

慢性中耳炎の患者に日常しばしば使用する点耳薬が、起炎菌に対して、どのように作用しているかの問

題を考えるのは興味深いことである。今回、慢性中耳炎の起炎菌のうち、ブドウ球菌、 β -溶連菌、緑膿菌

* 金沢医科大学耳鼻咽喉科学教室

** 金沢医科大学耳鼻咽喉科学教室